

こどもの為の一人芝居

『おっきな人間　ちっちゃな人間』

岡安　伸治

今日のお話は「おっきな人間ちっちゃな人間」というお話です。

さあ、今日の朝お父さんお母さんに「おはよう」って言えた？  
道で友達に会って「こんにちは」って言えますか？

「おはよう」「こんにちは」ってどこの言葉ですか？

日本のあいさつの言葉ですよ。

じゃ、外国の言葉で「おはよう」「こんにちは」って何か知ってます？

隣の韓国とか北朝鮮っていう国では「アンニョン」「アンニョハセヨ」「アンニョハシムニカ」って言います。

その隣の中国では「ニーハオ」

そひから下におけるとインド。インドの国では「ナマステ」

それからアフリカのケニアという国では「ジャンボ」って言います。

そして日本では「おはよう」といって、こうやっておじぎをするけど、外国ではどうしますか？  
握手したり、抱き合ったりしますね。

今日の朝、ご飯食べた？　箸、上手に使える？

箸使わずに手で食べる人？

でもインドの国では、カレーなんかを手で食べるんですね。

手の上にご飯のつけて、カレーつけてこうやって食べちゃう。

それからアメリカとかヨーロッパの人たちは、ナイフとフォークを使って食事をします。

でもどうして食事の仕方が違ったり、あいさつの仕方が違ったり、言葉がちがったりするのでしょうか？

ほら、地球にはいろんな国があって、いろんな人が暮らしている。

顔の色が黒い人、白い人、茶色い人、黄色い人、いろんな人が暮らしている。

そして地球は、この大地ができて、これ。

バックの絵をつかいながら

さあ、地球はこの大地ができて、これは？　火山が噴火したり、カミナリがなったり、カミナリがなるとやがて雨。

雨のあとには虹。

寒い冬には雪。

やがて春、花が咲いて山は緑になって、木は伸びる。

太陽の陽を浴びてさらに伸びる。

雨は川となって湖をつくり、海に流れていく。

そして、その海は世界中を駆けめぐる。

世界の人たちは、いろんな仕事をしてますよね？

例えばこれ、木を植えたり切ったりする仕事。

畑とか田んぼを耕して、米とか野菜をつくる仕事。  
家を造る仕事に、船にのって魚を釣る仕事。

それじゃ、おじさんの仕事は何だ？

おじさんの仕事は、この絵一枚でいろんなお話を見てもらう。  
例えば、太陽さんが月のウサギさんを好きになって、いいところまでいったなあという時、ライオンが横取りした話とか。

おじいちゃんが、若くなりたくて若返りのリンゴをたくさんたべたら、赤ちゃんになってしまったお話とか。

たくさんのお話をしながら旅をする。

そして、カンカン照りの日は、この傘をさして旅をして。

雨の日もこの傘をさして旅をします。

それから、この古いトランクの中に何が入っているかというところ…

せんす。  
これは、お話に使うの。こうやってやると、割り箸。これは？ 歯ブラシ。クシ。ちよんまげ。

これ、ラジカセ。

これで音楽を聞いて、夜はぐっすりと眠ります。

みんなね、一人ぼっちでいる時寂しいことない？

おじさんは、ないぞ。だってね、おじさんの中に「ちっちゃな人間」がいるから。

今日は、その「ちっちゃな人間」のお話をこの絵を使って、これから始めたいと思います。

これから始まるお話は、昔々のそのまた昔のお話。  
でも、いったいどのくらい昔だろうか？

何の声？ 恐竜の声。でも、ジュラシックパークのお話じゃありません。恐竜のお話ではありません。

まだ神様が、この地上とか空の上を飛び回っていたころの古いお話。

あるところに、それはそれはおつきなおつきな人間と、それはそれはちっちゃなちっちゃな人間がおりました。

大きいといったって色々あるよね。

いったいどのくらい大きいのだろう？

おつきなおつきな人間は、ふたまたぎもすると日本の国を北海道から沖縄の方までいってしまうほどだった。

おつきな人間は、今のインドの山、あのヒマラヤだ。インドの山にもたれては、中国の方へ足をなげだして、毎日することもなく棒で日本海を、ペチャンペチャンと叩いてはすごしていた。

「エヘヘ…」  
すごいね！

神様は

「やれやれ、 何ということだ…」

雲の上へによつきりと出ている大きな目玉をみて、そんなおつきな人間を創ってしまった神様は、えらく自分の失敗になさけない日々をおくっていた。

「なんであんなおっきな人間を創ってしまったのか。ばか…」

「おーい、おっきな人間よ」

「おーい、こつちを向けおっきな人間」

「… なんだクシャミか」

「あらっ？」

そんなある日、神様の耳に地上のどこでやら小さな小さな声で「神様、神様」と呼ぶ声が聞こえてきた。

「あれれ、どこでやら声が…」

と思つて雲の下をのぞいてみると。

山の大きな一本杉の根元のところにちっちゃなちっちゃな人間が、その大きな杉の木のでっぺんに向かって、願い事をしているではないか。

「私は、小さくて小さくて、こんな米つぶにもたりない、風に吹かれて飛んでいくタンポポの種より軽い小さな小さな人間です」

「ありやうや…」

と神様はひたいに手をあてて、思わずためいきをついた。

これは神様がその昔、自分で創つておきながらあまり小さすぎるといので、ぽいっとほおつておいたのをすっかり忘れていたんだ。

「どうか、大きな杉の木の上の、その雲の上の方のずっと上の方にいる神様、お願いします。こんな小さな小さな私のたった一つお願いします。こんな小さく創られたことをうらみに思いません。ですけど、友達がいないのが一番つらいのです。アリにだつて負けません。大蛇のようなミミズにだつて負けません。どんな大きなクマだつてへっちゃやらずです。ただでだけ…」

その小さな小さな瞳に大きな大きな涙があふれていた。

神様は

「いやいや私としたことが、修行がたりんで色々なものを創ってしまったがここにも、こんなところにもあったのか…」

とまたまた大きなためいきをついた。

おっきな人間は動きまわると海や山は嵐に、砂漠は砂あらしがおこったりするので、おっきな人間ばかりめだつて小さな方をすっかり忘れていた。

と、あらためて耳をすませると。

大きな杉の根元のこけの花の間から、その声は聞こえている。

「ただでだけ… どうか、どんなことでも話せる友達を下さい。もし下されば、その友達とどんなことでも一緒にがんばりぬいて、りっぱに生きていきます。お願いします。こんなちっちゃな私のたった一つの、一つお願いします。どうか神様」

とうとう小さな瞳から、涙がこぼれ落ち、こけの白い花びらをほんの少しだけぬらした。でも、小さなしずくの音は神様の心に、それはそれは大きく大きく広がった。

「これは困った。だいたい今までだと、願い事というと例えば、カエルはゲロゲロ、グワグワという自分の鳴き声が気に入らないからかえてくれとか、カラスは黒でなくシルバーにしてくれとか、セミは土の中に五年も六年もいるのは我慢できないとか、一年ごとに恋をしては片思いで真っ赤になるモミジは、春にも恋をさせてとか、みんな勝手ばかりをいう」

しかし、このちっちゃな人間のいうことはそれとは違う、なんとなく心ひかれるものがある。

神様も自分の失敗の事もあるので、なんとなくその願をきかなければいけないのではないかと思った。

そこで、雲の上にぼんやり顔を出しているおっきな人間を、そのちっちゃな人間にひき合わせてみようと考えた。

おっきな人間に声をかけようとして近づくと、そのおっきな人間はイソギンチャクやヤドカリみたいに、すつと雲の中へ顔を引っ込めてしまう。

気をつけて近づかないと臆病者のおっきな人間は、慌てて立ち上がったりにして、海へ足を入れたひょうしに大津波を起こしたりしてしまうので大変だ。

この間もなんと神様のあくびに驚いていきなりかけ出し、太平洋の海の底の火山帯をふんずけたものだから、火山が何か所も噴火して島が幾つも出来上がったしまった。

それで出来たのがハワイの島だ。

はてさて、どうやっておっきな人間とちっちゃな人間をひき寄せたらよいものやら。

ちっちゃな人間は小さすぎておっきな人間には見えないし、これは大きすぎてちっちゃな人間にはおっきな人間が見えない。

「はてさて…」

「どうしたらよいものやら…」

「これだ！」

そこで神様は、ちっちゃな人間に大きな杉のてっぺんに登り、おっきな人間を大きな声で呼ぶように命じた。

「おーい、ちっちゃな人間、おーい」

「あつ、いたいた」

「早くおいで…」

「早くおいで！」

「ぼく！」

「えっ？… 登る！ 登る！」

「こんな高い木、登れないよ」

「えっ、本当。友達を。登る登ってみる」

「わあ、やったあやったあ！」

虫の声にかき消される様なちっちゃな人間の声だが、それでもうれしくてうれしくて何日もかかって杉の木のでっぺんに登りつくと、目を輝かせておっきな人間を呼んだんだ。

「おっきな人間さーん、おっきなおっきな人間さーん！…」

初めのうちはおっきな人間の大きな耳には、ちっちゃな人間の声は届きませんでした。が、幾度となく雪が降り。

「おっきな人間さ・さ・さ…」

「おっきな人間さ・さ・さ…」

「ハクション！」

「わあっ！」（落ちそうになって）

幾度となく花が咲き、杉も大きくなると、ちっちゃな人間の声もだんだん大きくなり、おっきな人間の耳にも届くようになり、臆病者のおっきな人間も少しずつ少しずつそちらの方へ近づいていくのだった。そして、とうとうある日どんどん近づいて、ちっちゃな人間のいる杉の木の山に大きな耳をおしあてた。

ちっちゃな人間にとって、それはまるで天にフタをしたように見えた。

「わあー、全部耳」

「よーし、いくぞ。一、二、三、それ！」

そこでちっちゃな人間は、ぴよこんとおおきな人間の耳の中に飛びうつり、耳の奥へ奥へと入っていった。

どんなに声が小さくとも耳の奥へ入っていけばもつとよく聞こえるから。

「聞こえるかい！…」

「聞こえないのかな…」

「もう一回、もう一回」

「おっきな人間さん、聞こえるかい！」

「ああ、聞こえるとも」

「わあ、やった！」

「聞こえた！聞こえた！」

ちっちゃな人間は、うれしくてうれしくて踊るように走っていった。

じゃ、ちよつとおじさんが踊ってみるから、きつとこんな風に走っていったんだ。

踊りを踊る

こんな風に走っていったんだよ！

さて耳の一番奥までくるとうれしさのあまり、どこかにいる神様に向かって思いっきり大きな声で。

「神様！ありがとうー！」

と思わず叫んでしまった。

杉の木の年輪が数えられないほどおっきな人間を呼び続けていたので、昔よりずっとずっと大きな声に

なっていたのをすっかり忘れていた。

だからおっきな人間の頭の中は

「神様、神様、神様、神様……」

「ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう……」

大つりがねをうち鳴らしたようになり、びつくりしたおっきな人間は、うわつとばかり立ち上がるとめくらめつぼう走り出した。

さあ大変だ。

「やめろ！」

地上はめちやくちや。

地震やカミナリ、大津波がおきて大変だ。

慌てて神様が後を追って静めようとするが

「こら！ おっきな人間、静まれ！ 止まれ！」

そんなことではとてもとても。

「大つりがねだ。頭の中に大つりがねだ！」

ほとほと困って神様はついに、今まで誰も見たこともない大きな大きなカミナリを

「えいっ！」

とばかりおっきな人間に投げつけた。

「ピカッ！ ゴロゴロ！ ……」

「うわっ！」

それはとてもない大きな音と光をともなったもので、まるで天がまっ二つに割れんばかりのようだ。

おっきな人間もこれにはかなわない。

この世の終わりのような大きな声を出したかと思うと、そのからだはこなごなに星くずのように七色に光って世界中に散らばった。

そして神様は、もう二度とこんなことが起こらないようにと、世界中に散らばったおっきな人間のからだから、今の大きさの人間が生まれた。

ほら、あいさつの仕方が違うとか、食事の仕方が違うとか、皮膚の色が違うとか、そんな今の人間が創られた。

でも、あいかわらずちやな人間は、今でもそれぞれの一人一人の耳の奥にいて、昔の神様との約束を守り。

誰かが臆病になると

「弱虫じゃないぞ」

誰かが悪いことをしようとする

「いけないよ」

とか

そして独りぼっちで寂しい時は

「ぼく、ここにいるよ」

と言ったりする。

でも、今ではちっちゃなちっちゃな人間も昔のことにこりて、決して大きな声は出さない。  
なぜって、おおきな人間みたいにみんなが大あばれしたら大変だもん。

そつとささやきかける。

そして、不思議なことに心から楽しいときやうれしいときは、ちっちゃな人間の声は聞こえない。  
なぜって、きつとそれはちっちゃな人間もいっしょに笑っているからなんだ。

これがおじさんの「ちっちゃな人間」のお話。

みんなの中の「ちっちゃな人間」元気ですか？ 笑ってますか？

今度会うときは、この絵の中から他のお話をつくって、また会いたいと思います。

おじさんこれから他の所でお話をしてきます。

今度会うときまで、みんなの中の「ちっちゃな人間」たいせつに。仲良くして下さいね。

幕